

### (3) ②様式第3号-2 (報告書)

NITS・教職大学院・教 育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 宇都宮大学教職大学院 事業名：【NITS・宇都宮大学教職大学院コラボ研修】 デジタル学習基盤を前提とした新たな時代にふさわしい学び 開催日時：令和7年8月30日 10時～12時 開催場所：宇都宮大学峰キャンパス（栃木県宇都宮市峰町 350） 参加人数（総数）と参加者の属性：71名（学卒院生12名、現職院生17名、学部生3名、教育委員会8名、小学校教員7名、中学校教員4名、高等学校教員2名、特別支援学校教員2名、大学教員15名、一般1名）
--	--

#### 目的：

GIGA スクール構想の推進や教育 DX の進展により、ICT を活用した学びが日常化しつつある今日、教員にもデジタル学習基盤を活かした新たな時代にふさわしい学びの在り方が求められている。児童生徒一人ひとりの多様な学びを支え、個別最適な学びと協働的な学びを統合的に実現するためには、教師自身もまた、デジタル技術を活用しながら「主体的・対話的で深い学び」を追究し続ける姿勢が重要である。そのような文脈において、ICT 活用を前提とした授業改善や学校運営の在り方を見直し、教育の質的転換を支える教員研修の方向性を探ることが本事業の目的である。

具体的には、デジタル学習基盤を活かした授業改善のために必要な組織づくりとは何か、また、それを支える教師のリフレクションの在り方について講演者より話題提供をいただき、参加者が自身の「授業観」や「組織観」、さらに「デジタル時代におけるリフレクション」の意義について理解を深めることを本研修の内容とする。

#### 内容：

冒頭に、宇都宮大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻長より、挨拶および本企画の趣旨説明があった。

続いて、白鷗大学教育学部教授の上野耕史先生より、「デジタル学習基盤を前提とした新たな時代にふさわしい学び」と題した講話をいただいた。講話ではまず、教育改善を進める枠組みとしてエンジニアリングデザインプロセスを活用した「ニーズ探究」と「シーズ探究」の重要性が示された。教育におけるニーズ（社会や児童生徒からの要請）とシーズ（新たな指導法や ICT 技術）を適切に結び付けることが、授業改善の基盤となる考え方であることが説明された。

ニーズ探究の視点からは、現代社会における日本の課題がデータを基に提示された。日本のデジタル競争力は世界 31 位であり、特に「人材」や「デジタル・技術スキル」に関する評価が低いことが示された。また、偽・誤情報を見抜く力や、インターネット上の情報の信頼性を確認する行動（ファクトチェック）の実施率が、他国と比較して低い状況にあることも紹介された。さらに、人生 100 年時代を迎え、従来の「教育・勤労・引退」という三段階モデルから、生涯にわたり学びと労働を行き来する「マルチステージ型」社会への移行が進んでいることが指摘された。これらを背景に、次期学習指導要領改訂を見据え、情報活用能力の抜本的向上や、自らの人生を主体的に切り拓く力の育成が急務であることが強調された。

また、児童生徒の実態についてもデータを基に説明があった。35 人学級を想定すると、経済的困難を抱える家庭の子供、特別な支援を必要とする子供、日本語指導が必要な子供などが一定数在籍していることが統計的に示され、教室がすでに高度に多様化している現状が共有された。栃木県においては端末整備は進んでいるものの、活用の深度に地域差があることや、大都市圏と比較して多様性に触れる機会が相対的に少ないことなどの課題も挙げられた。

これらの課題に対するシーズ探究として、ICT の積極的活用と、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が提言された。情報活用能力を「学習の基盤となる資質・能力」として位置付け、教科等横断的な視点から、デジタル学習基盤を前提とした新たな学びを構築していく必要性が示された。

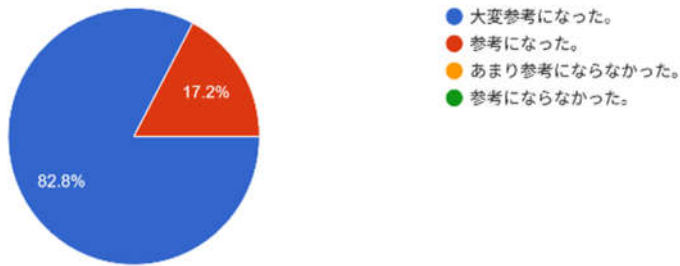
最後に、専攻長より講師への謝辞が述べられ、研修会は閉会した。



## 成果：

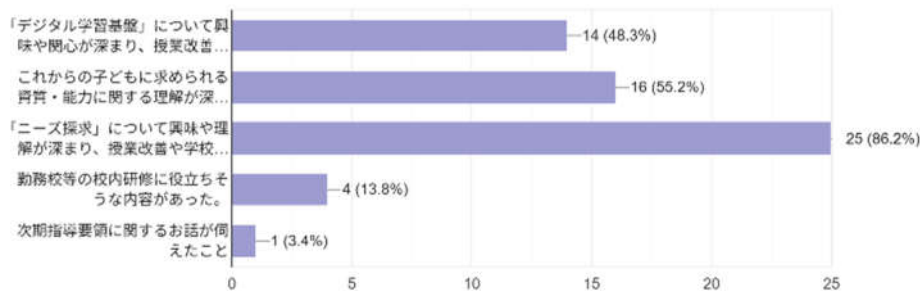
②本日の講演内容について、総合的な評価をお聞かせください。

29件の回答



③ ②で「大変参考になった」「参考になった」と...当てはまる項目を選んでください（複数回答可）。

29件の回答



研修後、参加者にアンケートへの協力を依頼した（回答率41%）。まず、研修全体に対する総合的な評価を4件法で尋ねたところ、「大変参考になった」「参考になった」の合計が100%となり、参加者の満足度は高かったことがうかがえる。

次に、具体的な項目について確認したところ、『「ニーズ探求」について興味や理解が深まり、授業改善や学校改善に取り組む意欲が高まった。（25件86.2%）』、「これからの子どもに求められる資質・能力に関する理解が深まった。（16件55.2%）』、『「デジタル学習基盤」について興味や関心が深まり、授業改善に取り組む意欲が高まった。（14件48.3%）』といった項目が上位に挙げられた。とりわけ「ニーズ探求」に関する項目の割合が高く、本研修の中心的なメッセージが参加者に強く受け止められていたことがう

かがえる。

また、参加者の自由記述には、次のような声が寄せられた。

「本日は貴重なお話をありがとうございました。ニーズをしっかりと把握することの大切さを教えていただき、探究やSTEAM教育に対する認識が変わりました。また、これまで探究のゴールだった『分析すること』はAIに任せて、これからはその先を目指さなければ、という言葉を重ねるようになりました。とても参考になりました。ありがとうございました。」

（高等学校教諭）

「自分の経験や流行の教育ワードに頼って授業を設計しがちでしたが、改めて、目の前の子どもたちや地域の実態を理解し、それをシーズと組み合わせる授業をつくることの大切さを実感しました。また、情報活用能力については、他国との比較を通して日本の課題が浮き彫りになりました。現場では「スマートフォンは持つな」と指導していますが、そうした対応は時代にそぐわないのではないかと感じています。その一方で、我々教員自身に情報活用能力を指導するだけの資質が備わっているのかについては疑問も残りました。今回の学びを通じ、今後の学校で教員に求められる役割を改めて理解することができました。」（中学校教諭）

また、2月14日に実施した宇都宮大学教職大学院教育実践フォーラムにおいても、本研修の内容や視点が参加者の発表や協議に反映されていた。参加者はニーズとシーズの視点を自らの実践に引き寄せて捉え直し、今後の授業改善や学校改善に向けた具体的な課題意識を高めている様子が見え、本研修の成果が着実に浸透していることが確認できた。

## 「NITSからの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

本研修では、ICTを活用した授業改善やリフレクションの在り方、さらにそれらを支える組織的な環境整備についての講話を踏まえ、参加者自身の実践をもとに対話を行う構成とした。これは、知識伝達型ではなく、実践を起点とした省察と再構成を重視する研修への転換であり、「NITSからの提案（第一次）」が示す方向性と重なるものであると感じた。

また、ホームカミングデー記念講演として実施したことで、現役院生や修了生、県内教職員といった関係性のある参加者が集い、安心感のある雰囲気の中で対話が生まれやすい場となっていた。さらに、質疑応答ではICTを活用した双方向のやりとりが行われ、研修そのものがデジタル学習基盤を前提とした学びの在り方を体現していた。研修担当者として、対話性とICT活用を組み合わせた研修設計の重要性を改めて実感した。

## アイデアや工夫したこと：

本事業を宇都宮大学教職大学院ホームカミングデー記念講演会として実施し、現役院生、修了生、栃木県内の教職員が効果的に交流できる場とした。また、本学教職大学院および教職員支援機構（NITS）の活動について広く周知できるよう、当日の運営を工夫した。さらに、質疑応答ではICTを活用して質問を個別に投稿・共有できる仕組みを導入し、多くの質問と回答が行われるようにした。